

[研究1]からは、少女たちに、性にかかわる正しい情報だけでなく、メディアのもつ意味や作用についての認識を高め、さらには社会における女性・男性をめぐる構造など、真の自己決定をより可能にするための情報を十分に提供する必要が再認識させられる。

それには、一つには学校などの教育の場での、さまざまな情報提供や、それらを実質的に学習できるための条件を作り出していくことが必要だろう。

性に関しては、身体的な面（妊娠・避妊・中絶・性感染症・エイズなど）に関する正しい情報や、さまざまなセクシュアリティのありよう（異性愛・同性愛・性同一性障害など、また商業メディアで提供されるポルノ的でない対等な人間同士の性関係の姿）についての情報提供が考えられる。

メディア・リテラシーに関する教育も欠かせない。商業メディアの提供する情報の氾濫する社会で、メディアの仕組みや作用を理解し、情報を有効に利用できる力とともに、それを絶対視せずにクリティカルに読み解く力、自ら発信する力を高めることは、一般的に主体的に生きることにつながる。また、少女たちに向けられるメディアの視線を相対化するためにも有効だろう。

さらには、今日の女性と男性の社会的な関係の構造や、それを変える可能性や方策などについての女性学的な学習も、年齢に応じた形で取り入れたい。

これらのいずれについても、市民や専門家の協力を得て、適切な資料づくり、少女たちの共感を得ながら指導できる人材養成などをしていくことが求められる。

教育という形ではなく、彼女たちが日頃接しているメディアを通じ、正しい知識やたとえば相談できる機関などについての必要な情報が、つねに抵抗なく入手しやすい形で提供されるようにすることも重要である。さらには、いわば上からの指導や情報提供という形ではなく、当事者自身が発信でき、同世代間で情報を交流しあえる場を提供していくことも考えられる。

少女向け情報の充実策に比べ、成人男性向けに、他者としての〈女子高生〉に代わる視点の情報を対

抗的に提供していくことは、実際にはかなり困難であろう。しかし、それでも男性に向けて、女性の側から見た身体的・心理的現実についての情報を少しでも入れていくことは意味がある。その意味では、女性の書き手が女性の側から見た現実についての情報提供を増やしていくことは有効なのではないだろうか。

[研究2]も、マスメディアの健康情報を鵜呑みにするのではなく、人々の自己判断能力を高め、個人や家族、地域生活に根ざしたセルフケア能力の向上が必要であることが示された。やはり、自分の経験できる現実をきちんと認識することで、マスメディア情報を評価し、正しく自分に合ったものを選択しつつ利用する能力を高めることが重要であろう。その場合、専門知識をもつ保健・医療の専門職が、患者・住民が個別に判断するための情報を提供したり情報の取り入れ方を手助けすることも期待される。

<付記>

研究1は、分担研究者の村松と、研究協力者の佐藤（佐久間）、苫米地、辻、花田、岡井、久保田、平野による共同研究で、調査、雑誌分析とも、企画・実施、結果分析にあたっては全員で協力して行った。ただし、報告書については、全員での討議を経て、各報告冒頭・各章末尾に記した文責者が執筆した。

思春期女子に対する成人男性の視線と行動に関する研究

——杉並区・浜松市の若年女子調査と大人向け雑誌の分析（3年次報告）——

分担研究者 村松 泰子

研究協力者 佐藤（佐久間）りか 菅米地 伸 辻 泉 花田 智弘
岡井 崇之 久保田 京 平野 亜矢

<第一部> 思春期女子の意識と経験に関する実証的研究

研究協力者 佐藤（佐久間）りか

A. 研究目的

1990年代初頭より、思春期女子の性行動が活発化している。若年期の性行動の活発化は、望まない妊娠や性感染症の増加、さらには性暴力や売買春、麻薬犯罪などに巻き込まれるリスクの増加につながる可能性があることから、女性のリプロダクティブヘルスを考えていく上で、非常に重要な問題である。

こうした変化の背景には、親や教師などの保護者世代が、若者の性行動に対して寛容になってきていることがあると思われるが、同時に「ブルセラ」「援助交際」など、若年女子を性的関心の対象とするような成人男性の性文化の隆盛も見逃せない。実際に援助交際に関わっている少女たちの割合は3～4%に過ぎないといわれる¹⁾が、メディアや一般社会から「性的な存在」として位置付けされるようになったことで、その他大多数の少女たちにも、従来とは異なる性意識が芽生えているのではないかと思われる。近年の高校生女子の、性交経験率の増加²⁾はそうした意識の変化を反映しているといえよう。

本研究は、<女子高生>という性的商品を生産し流通させている今日のメディア環境が、思春期女子の性行動の変容にどのように関わっているかを探るため、質問紙郵送調査と面接調査を通して、少女た

ちが自分に向けられる成人男性のまなざしをどう捉え、受けとめているかを分析する。

B. 研究方法

1. 本年度調査研究の目的

平成11年度研究として実施した杉並区・浜松市における高校就学年齢の女子2000人の無作為抽出質問紙調査の結果について、地域差以外の要因の分析に加え、自由回答部分の解析と小人数の回答者へのインタビュー調査を行うことによって、自らに向けられる世間の（特に成人男性の）まなざしを少女たちがどの程度意識しているか、それが彼女たちの行動にどのような影響を及ぼしているか、といったことを中心に、質的な分析を深めることを目的とする。

2. 調査方法

調査地域： 東京都杉並区ならびに静岡県浜松市

調査対象： 1981年4月2日～1984年4月1日生まれ
の女性

調査対象の抽出： 住民基本台帳より無作為2段階抽出（各地域40地点）

調査票発送数： 各地域1000名・計2000名

調査時期： 1999年11月初旬～12月中旬（この間

督促1回)

調査方法： 質問紙郵送調査（返信用封筒を同封）

有効回答数（率）： 杉並区 589 名（58.9%）

浜松市 512 名（51.2%）

上記の調査の際、後にインタビューに答えてもよいか、という質問を設け、236 人より「答えてもよい」という回答を得た。今年度研究では、この中から各地点 6 名ずつの協力を得て、補足的な質的調査をおこなった。その方法の詳細については後述する。

3. 調査内容

①フェース・シート（3 項目）、②制服の着用とそのイメージに関する項目（5 項目）、③街中での年長男性との接触経験に関する項目（12 項目）、④マスメディアに描かれる〈女子高生〉イメージに関する項目（5 項目）など、全 27 項目。うち自由記述である Q33 と Q35 以外は、前年度研究報告書で単純集計と地域差の分析について報告した。

C. 研究結果

1. 前年度報告書の概略

平成 11 年度研究報告書においては、主に都心部（東京都杉並区）と地方都市（静岡県浜松市）の地域差を中心に、高校就学年齢の女子の、成人男性との接触経験ならびにメディアにおける〈女子高生〉イメージに対する意識について報告を行なった。

その結果、杉並区でも浜松市でもおよそ 5 人に 1 人が金銭の提供を前提とした誘いを受けたことがある、ということがわかり、街中で大人の男性から「性的商品」として扱われる経験が、もはや首都圏の少女たちに限られたものではなくなっていることが明らかになった。

その一方で、制服を着ているときの男性の視線に対する意識、実際に声をかけられたときの反応、メディアが年長男性の行動に影響しているという認識、「女子高生の援助交際や性」についての話題を目にするメディアの種類、「援助交際」の定義などの項目においては、有意な地域差が見出された。このことから、通学途中の公共交通機関の中で、雑誌の見出し広告に接触したり、痴漢行為の被害に遭ったりす

る機会の多い杉並区の少女たちの方が浜松市の少女たちより、自分たちが「性的な商品」とみなされていることをより明確に意識しているのではないか、という考察が導かれた。

今年度の研究においては、昨年度のこうした研究結果をもとに、質問紙調査のデータの質的な分析と地域差以外の要因の分析を行ない、さらにインタビューを通じて、より丁寧な分析を行なって行く。

2. 自由記述欄の分析

ここでは前回の報告で割愛した、自由記述形式の質問である Q33 「…マスコミで描かれる〈女子高生〉イメージについて、あなたがいいと思うところ、イヤだと思うところがあれば、お書きください」と Q35 「今の時代に『女子高生であること』には、どんなよい点があると思いますか?」という 2 つの質問について、詳しく見てみる。

まず、どちらの調査地においても、マスコミで描かれるイメージにはネガティブな印象を抱いている人のほうが圧倒的に多い。Q33 に対して「イヤなところ」に回答した人の割合は、杉並で 93.4%、浜松で 85.4%と、杉並の方が有意に高い ($p < 0.001$)。これはおそらく東京の女子高生のほうが、メディアに取り上げられることが多いからだろう。両地域に共通するのが「すべての女子高生を一くくりにして、個人を見ていない」という意見である。

この場合、問題とされるのは外見上の特徴と内面的な特性、さらに外見と内面の結びつけ方の 3 点がある。一つには「ミニスカートにルーズソックスのイメージ」が定着していて、誰もがそういう恰好をしていて、個性がないと思われるのを不愉快に思うもの、あるいは「ガングロ、茶髪、厚底靴」あるいは「ヤマンバ」と呼ばれる化粧など、「ギャル」特有のファッションと女子高生全般を同一視することに不満を訴えるものがある。一方、「バカっぽい、下品」「ふしだら、道徳心・マナーがない」「お金に釣られやすい」など、内面的な軽薄さを強調する報道に異議を申し立てるものもある。さらに「外見のみで判断するのはやめて欲しい。ガングロでもいい子はい」「清纯系とギャル系を比較しないで欲しい。清纯

系の奴らの方があぶない」といった、見た目だけで内面まで推し測るようなイメージ作りを批判する意見もあった。

杉並・浜松いずれの地域の回答者も、マスコミが描き出す<女子高生>イメージが画一的であると思っているのだが、杉並の回答者がそのモデルとなっているのは「渋谷・新宿などに集まるほんの一部の女子高生」だと理解しているのに対し、浜松では「女子高生は東京にいるような人ばかりではなく、他県ではかなり違うと思う」というように、あくまでも“東京”全般の女子高生を描いたものとみなす傾向がある。浜松のほうが「イヤなところ」を挙げる人が少なかったのも、そもそもそうした<女子高生>イメージとアイデンティファイしようとしなからかかもしれない。

その他に「女子高生ばかり報道しておじさんをあまり報道しない」「コギャルを批判するようなコメントをしながら、それをネタにして高視聴率を狙っている」といった、客観的にメディアのあり様を批判する意見が出ており、「中学生・小学生がこれが普通だと思ってしまうのがいや」「マスコミに乗せられている少女たちがいや」というようにメディアが少女たちに及ぼす影響を懸念する声もある。

一方、「いいところ」に回答した人は、杉並 37.7%、浜松 38.9%と、有意な地域差はなかった。そのなかには「今を満喫している、明るい、元気、はじけている、個性がある」といった若者らしいポジティブなイメージに加え、「流行を生み出している／流行に敏感／最先端を行っている」というイメージが挙げられており、マーケティング上注目されている集団であるということが自信の源になっているようだ。

(参考までに、文末の別表2に「マスコミイメージのいいところ」の回答の一部抜粋を掲げたので参照されたい。) さらに一歩進んで、「女子高生というだけで世間はずれなことをしても許される」「女子高生自体の価値や社会的地位が高まったように感じられる」「周りの目を気にせず自由に振舞っている、なんでもあり」などというように、「女子高生＝特権階級」というイメージすらあることが、自由記述から読み取れる。

これと似たような回答が多く見られたのが、Q35である。「今の時代に『女子高生であること』には、どんなよい点があるか」という質問だが、一番多いのは「自由である」という回答だ。同様に「好きなことができる」「何でもやれる」「いろんなことに挑戦できる、いろんな経験ができる」といった意見もでている。但し、この「自由である」という回答には、<女子高生であること>が中学生や大学生、社会人に比べて、あるいは男子高校生に比べて、より自由であるという意味合いと、戦時中や親の世代と比べて“今の時代に”女子高生であることがより自由であるという意味合いの両方があるようだ。「自分の将来を自由に選択できる」「価値観が多様で個性が認められる」といった回答は、むしろ後者を意識した回答だろう。

一方、「若い、若さをアピールできる、青春だから、ピチピチ」など若さを強調する回答は、同じ社会の中の大人に比べて若者が、という意味合いがあることが推測されるが、単に「若い」というだけでなく、「女子高生」という身分の特殊性を強調する回答も非常に多い。たとえば、「女子高生のときしか出来ないことがある」「女子高生ということで注目される、優遇される、ちやほやされる」「女子高生だからということで許される、甘えやわがママがきく」といったものであるが、「女子大生」や「OL」になってしまったらもう今のように振舞えない、という意識があることがわかる。

さらにQ33と同様、「時代の先端、流行の発信源、流行を生み出す」など、自分たちが社会的に注目されている存在であることを自覚した回答も多く、そこから「社会の中心、時代の主役、社会的影響力が強い」といった、強気の発言にもつながって行くのではないだろうか。もちろん、Q35への回答のうち1割前後は「いい点などない・特にない」「悪い点がある」といった否定的な反応であり、必ずしもすべての回答者が「女子高生であること」を肯定的に捉えているわけではない。どちらかというところ、杉並区の回答者のほうが懐疑的な反応が多い。

Q33とQ35の回答からいえることは、回答者たちが、メディアが作り上げた一面的なシブヤ系（ある

いは「東京」)の<女子高生>イメージに対して反感を抱きつつも、そうして注目を浴びていることを必ずしも否定的には見ておらず、むしろ期限付きで与えられた自由を十分に謳歌しようとしている、ということだろう。

3. インタビュー調査

昨年度の郵送質問紙調査(1101名回答)の際、「インタビュー調査に応じてもよい」と答えた236名の中から、以下の条件に合う回答者に絞りこんで杉並・浜松各6名のインタビュー対象者を選抜した。

- ・ Q9「あなたはオジサンから声をかけられた(ナンパされた)経験はありますか」という問いに対し、「よくある」「1~2回ある」と答えた人³
- ・ Q22で最後に声をかけられたのが「今年(1999年)」と答えた人
- ・ Q5で制服着用時に男性の視線を「感じる」と答えた人、もしくはQ12~13で「お金をあげるから」「何か買ってあげるから」といわれた経験がある人

従って、インタビューイは、ある程度成人男性との接触経験が多い人たちということになる。

表1 インタビュー協力者の年齢

	浜松市	杉並区
16歳	3名	0名
17歳	2名	5名
18歳	1名	1名
合計	6名	6名

ここでは、主にメディアに流通する<女子高生>イメージ、「援助交際」の定義と自分自身が声をかけられた経験、そして「いま、女子高生であること」の意味等について、質問紙調査の回答をもとに、さらに詳しく話してもらった。併せてメディア接触、交友関係の範囲など、各人の情報ネットワークについても質問した。面接時間は1人につき1時間から2時間半に及んだ。以下ではメディアにおける<女子高生>イメージ、女子高生としての自己アイデンティティ、女子高生の性的商品化の3点に絞って、インタビューから得られた知見を報告する。

なお、このインタビューはあくまでも昨年度の量的な質問紙調査の結果を補足することを目的として行われたもので、サンプル数も少ないことから、インタビュー単独で結論を導くことはできない。ただ第二部でも触れるように、マスメディアには女子高生の「生の声」を取材したと称するインタビュー記事が溢れており、本研究はそれらによって作られるステレオタイプを相対化して分析する際の参考にもなるものと思われる。

①<女子高生>イメージについて

平成10年度に我々が新宿と町田の街頭において本調査のプリテストを行なったところにくらべ、メディアに流通する<女子高生>のイメージ自体が大きく変わっていることを認識させられる結果となった。第一に、かつて<女子高生>のシンボルであった「ルーズソックス」「ミニスカート」「茶髪」は、もはや制服の一部と化した感があり、中学生にも広がっていて、女子高生同士の間では、もはや差異化の機能を果たさなくなっている。しかしながら、制服やルーズソックスが、未だに大人(特に男性)にとってはある種の記号性を持っているということを、当人たち(特に杉並の回答者)は意識している。

一方、99年以降<女子高生>のイメージとして突出するようになったのは、「ギャル」である。これは97年頃に流行したブランド志向のお洒落な「コギャル」とは異なり、殊に「ヤマンバ系」と称される特異なメークと不自然なまでの厚底靴で、強烈な印象を残した一派である。もちろん女子高生の間には「ギャル系」以外に、「オネエ系」「B系」「ロリータ系」などなど、ファッションや音楽の好み等によって、いろいろなグルーピングがあるのだが、「ギャル系」はボリューム的にも、存在感の面でももっとも突出しており、ここ1~2年の間にメディアで<女子高生>が取り上げられる際のメインターゲットとなってきた。

そのためか、今回のインタビュー協力者にも、こうした「ギャル系」の女の子たちとの比較を通して、自分自身を位置づけるような傾向が見られた。ただ、それは必ずしも対立的な関係ではなく、「ギャル系」

の子たちに多少なりとも共鳴していたり、昨年までは自分もギャルだったと答える回答者もあり、「ギャル系」の外見（ガングロ、つけ毛、白いシャドウ、厚底等）から内面（バカ、何も考えていない、ふしだら等々）を類推するような大人の見方に対して抗議する声も多く聞かれた。また、「東京の女子高生は言葉遣いとかコワそう」「やってることが凄そう」（浜松の回答者）とか「渋谷にいるような子は仲間意識が強くてコワイ」「渋谷とかのギャルって堂々しすぎてる感じがコワイですね」（杉並の回答者）と、「ギャル系」に対しては「コワイ」という言葉がしばしば使われるが、その裏には「いい意味で意識してない。なんか勇氣あるなあって感じ」「友達がいれば何でも出来る」といった意見もあり、「ギャル系」の少女たちの強い連帯感と傍若無人ぶりに対する憧れも多少あるようで、それは特に浜松の回答者に強いように感じられた。浜松は中核都市とはいえ、若者が集まる場所は限られており、東京の若者に比べて「世間」（近所の人）の目から完全に解放されるということがないからかもしれない。

一方、『学校へ行こう』などのテレビ番組に出て来る極端なギャル系の女子高生に関しては、「あれも一種の才能、お笑い芸人みたいなものだから」（杉並の回答者）といった、クールな反応もある。確かに1999年から2000年にかけて台頭したくヤマンバ>イメージは、従来のこぎれいで可愛く、従順そうなく女子高生>イメージを大きく突き崩す、ある種のパロディのような存在でもあった。極端にデフォルメされたメイクで、身長175~180cmでパソコンと歩き回り、周りの視線も気にせず地べたに座り込み、大口を開けて騒ぎたてる（と一般にみなされている）彼女たちは、男性の視線に媚びて過度にエロス化されたロリータ的なく女子高生>イメージに対する見事なアンチテーゼだとも言える。

だからこそ、そうしたギャル系の子を女子高生の代表として扱うことに反発しながらも、「ギャルにも幅があって何も考えてない子ばかりではない」（杉並）、「自分では自分のことをギャルとは思っていないけど、そう思われても悪い気はしない」（杉並）、「ギャルの子たちは援交なんてしてない、そう

いうのは髪の毛黒い子の方が多い」（浜松）といった擁護の弁が出て来るのだろう。

②女子高生としての自己アイデンティティ

Q35 のフォローアップのために今の時代に女子高生であることについて、もう少し踏み込んで質問してみた。今回のインタビューでは、質問紙調査時に高校3年だったが今は大学生になっている回答者が2名含まれていた。現役女子高生・卒業生に共通して見られたのは、高校時代というのはモラトリアムを満喫できる年代である（自由で気楽である）という意見である。中学時代に比べ行動範囲が広がっている、学校や親が本人の自主性を認めてくれる、といったことがあるようで、とにかく高校生活は「楽しい」という。

一方、Q35 で見られたような「時代の先端」「時代の主役」「社会の中心」といった自信たっぷりの発言については、メディアがく女子高生>をそのように取り上げているという認識以外には、はっきりした根拠は示されない。単に「マスコミや大人にチャホヤされる」（浜松）、「バイトで失敗しても許される」（浜松）、「買い物をしに行っておまけしてもらえ、万引きしても若いから大目に見てもらえる」（杉並）といった経験から導き出された認識に過ぎず、どうも根拠のない自信という印象を受ける。

マスメディアでは、女子高生の確信犯的な言動を取り上げ、彼女たちの主体性やしたたかさを強調するような報道をよく見かけるが、今回のインタビューでは、そうした語りが社会や大人に対する甘えに発していることが強く感じられた。「したたかさ」とは裏腹な“これほど世間から可愛がられている私たちがひどいことをされるはずがない”というような、甘い思いこみがあるように思われる。

現役高校生の回答者たちの間では、「高2くらいが一番楽しかった」「高2の夏とかが面白かった」（ともに杉並）という意見があり、高校生活に慣れて受験勉強がまだ本格的にならない2年生の頃が、一番楽しい盛りということのようだ。一方、浜松の高校を卒業して東京の大学に出てきている回答者は、「高校生のときは本当にバカなこととか迷惑なこと

も楽しい雰囲気に乗ってできたけど、今はそういうノリでやろうとすると絶対誰かが注意するし、やっぱり恥ずかしいと思う」と、無邪気で周囲の目を気にしないでいられた高校時代を懐しんでいる。一方、杉並出身の大学生は「大学生になって女子高生には興味がなくなった」といい、「女子高生に興味あるのってやっぱり女子高生なんです。自分たちがやっぱりその世代に一番興味があるから、だからそれにも影響されやすい」と、メディアのイメージと女子高生の行動の相互的な関係を分析している。

③女子高生の性的商品化

メディアの創り出す〈女子高生〉イメージにおいて大きな比重を占めているのが「援助交際」であることは、ほとんどすべてのインタビューイーが認めている。大半が高校入学以前に「援助交際」という言葉を耳にしており、実際に金額を呈示されたり、現金を自転車の籠に入れられそうになったり、あるいは「何でも買ってあげるから」といった誘いを受けたりしている。(但し、インタビューイーはスクリーニングの段階で、制服に向けられる視線に違いを感じたり、オジサンからお金やモノをあげるからと誘いを受けたことのある人に絞られている。)しかし、12人のインタビューイーのうち自分が一般に「援助交際」といわれる行為に関わったことがある、と認めたのは2名だけだった。残りの大半は、一部の女子高生がしていることなのに、全員がしているように報道されることに不満を訴えている。

実際に大人の男性に声をかけられてどう思ったかということを知っていると、「お父さん大丈夫かな」(浜松)、「お父さんに『しないでね、恥ずかしいから』といった」(杉並)と自分の家族にあてはめて考えたという答えが複数見られた。また、「こんな人が日本を動かしてんのかなって、だから日本だめになってきたのかなー」「日本も落ちてるんだなあって」(ともに杉並)と言った感想もあった。

援助交際をしたことがないと答えた人たちがなぜしないのか、というと、「何をされるかわからない」「ゆすられたらヤバイ」といった現実的な警戒心や「絶対あとでなんか返って来る」「あとで絶対後悔

する」という漠然とした罪悪感から「普通の金銭感覚がなくなる」「その金で買って空しさが残る」などの金銭感覚に付随した理由、「プライド」「小さいときからの、親からの常識的な部分」など人間性の問題、そして「(オジサンは)気持ち悪い」という皮膚感覚的なものに至るまで、さまざまな理由が挙げられた。しかも、一人の回答者がこれらのうちの複数の理由を、自分が援助交際をしない理由として挙げている。

一方、援助交際の経験を持つ二人については、非常に異なる体験をしている。杉並の高校3年生は、1年生のときに地方から出てきたと称する男性に写真を撮って欲しいと頼まれ、ホテルに連れこまれて乱暴された経験を持つ。彼女はその体験で「免疫がつき」、その後は声をかけられると主体的に相手と交渉して、援助交際をしている。「今だったらH無しで、そのぎりぎりのところまでで25000ならやる」、あるいは「朝の山手線で5分で3000円とか、痴漢の援助交際(同じ時間帯に同じ車両に乗って来る相手に触らせて金をとること)と言った発言が相次ぎ、一見非常にしたたかな印象を受ける。それでいて「入れなければ平気とかは間違った知識だから」と言ったかと思うと、あとから「全然入れてないから別に危険無いじゃん」と言ったりして、必ずしも本当に自分がやっていることを完全に見切っている、とも言いきれない。「絶対援交とかやって、マイナスになったことは無い気がする」「いいことづくめ」と主張する一方で、なぜやるのか、というと、「お金は別にどうでもいい、なんとなく」「ん、わかんない。ほんとなんとか」と答える。高校1年の時の体験がなかったら彼女はどうなっていたのだろうか。明らかに性暴力被害に遭ったわけだが、それについて周囲からのサポートがあった気配はない。非常に早熟で聡明な印象を受ける少女だが、たった一人で乗り越えるには、あまりにも重い体験ではないか、と思われた。

一方、浜松の高校2年生は、これまでに一人だけと1年間の期限付きの愛人契約を結んだことがある。これも「援助交際だと思ってる」といいながら、彼女は「1回しか会わない援助交際って疑わしいよね

という。「援助交際でも一人の人間として、名前は嘘の名前であっても、家も知らなくても家の電話番号知らなくても、ただ携帯しか知らない、で、お互いのカラダしか知らなくても、やっぱり何回か会っていると情があるじゃん？そういう援助交際は、いいとは思わないけど、ある意味、心の整理がつくかな、と思う。」この相手とは、結局半年ほどつきあって「普通に関係が荒れて、普通に終わった」が、もう2度と同じようなことはしないだろうという。「その人は偶然だったと思ってるから。100人に1人の安全な人に巡り合ったと思ってるから」というのだ。「自分は自分が傷つかないやり方を選んだ」し「すごい悪いことをしたという実感もない」と悪びれたところはないが、「お母さんには納得できないこと」をしたという意識はあって、そのことを母親には話せないという。

この2人の体験談は非常に対照的であり、「援助交際」という言葉で括られている男女関係の多様さを改めて感じさせられた。どちらも金銭的なことが主な理由ではなく、援助交際が、世間一般に言われているように金目当てのものだけではないことがわかる。こうしたインタビューに積極的に答えようとする人々は、援助交際をしている女子高生の中ではかなり特殊な例なのかもしれないが。

今回のインタビューでは、杉並でも浜松でも、回答者の多くは「援助交際」自体はすでに下火になっている、あるいは流行が終った、という認識を持っていた。中には「久しぶりに援交って言葉を聞いた。ここ2年くらい使ってなかった」(杉並)という回答者もいたほどだ。一方、援助交際の代りに今ブームなのは「コンパニオンのバイト」だという意見が、浜松の複数の回答者から聞かれたので、それについて少し詳しく報告する。

たまたま浜松で最初にインタビューした高校3年生が、援助交際をしている子は少ないが「水商売」のバイトをしている子はごく普通にいる、という話をしたので、そのあと浜松の回答者にそれとなく話を向けたところ、残りの5人のうち1人が自分がやったことがある、2人はやったことがある友達を知っていると答えた。具体的には、アルコールを出す

店で飲み物を運んだり、酒を注いだりするバイトで、7時くらいから深夜0時あるいは2時くらいまで働いて、時給1500～3000円程度を稼ぐものらしい。

ごく普通のバーのようなものから、「ウサギのカッコ」や「看護婦さんのコスチューム」を着て出るイメクラのようなものまでいろいろあるが、その魅力は肉体関係を強要されることはない、ということのようだ。しかも車による送迎つきで、コスチュームのない場合でも、洋服を用意してもらって、ヘアメイクもしてもらえる。「援助交際とかで、変なオジサンと一対一でなんかするよりは、お水の方がずっといい」、「援交とかは、やっぱり体を売らなきゃいけない、とかっていうのがあって、でもコンパニオンは、援助が廃れてきてる中で、自分も興味あるカッコとかするだけで、お金ももらえる」ということで、女子高生の間で人気があるらしい。

本来18歳未満はできないが、友達や先輩の紹介、あるいは街中のキャッチの人、さらにはカラオケボックスや喫茶店においてある無料のバイト紹介雑誌等を介して見つけた店には、18歳とウソをついて入り込むようである(が、店側も承知しているという話もある)。1日体験コースというのもあって、3時間で8000円が稼げる。親にはカラオケに行く、と言って出かけて戻ってきても疑われない時間で、そこそこの金が稼げるというわけである。しかし、最初に話してくれたインタビューによると、こうした店には「コワイ人」(暴力団関係者?)がついていて、1回行くと「次もまた頼むよ」と言われて、断れなくなり、「また友達連れて来い」と言われ、どんどん抜けられなくなる、という。

今回は浜松でのみこの点について踏み込んで聞いたので、杉並にも似たようなものがあるのか?といった点については、結論を出せない。当人たちは「援助交際に代って出てきた」ものと認識しているようだが、第二部の雑誌記事分析のほうで収集した1990年代前半の記事の中にも、「コンパニオン」のバイトが女子高生の間で人気を呼んでいることに触れたものがあり、浜松でもずっと前からあった可能性も否定できない。

しかし、「ウリ」まで含めた援助交際がブームに

なったことで、相対的にコンパニオンのバイトの敷居が低くなったということも考えられる。体験コースなどで手軽に小金を稼げるようになっていて、送迎つき、メイクつき、コスチュームつきといったあたりも、「チャホヤされる」ことを当たり前とみなしている女子高生にアピールするのであろう。これも女子高生の性的商品化の一つの形態であり、今後こうした「水商売系」のバイトへの参入が増えて行けば、性暴力、強制売春、麻薬犯罪などのトラブルに巻きこまれるリスクも高くなることが予想され、注意が必要であると思われる。

4. 購読雑誌別に見た傾向

上記の自由回答ならびにインタビュー調査を通して、この年齢の少女たちがよくも悪くも、「ギャル」と呼ばれるタイプの少女たちが創り出す文化に影響され、それを意識しながら「女子高生」としての生活を送っていることが見えてきた。そこで、今度はそのような「ギャル文化」の成立に若者向けのメディアがどのように関与しているかを探るため、質問紙郵送調査の方に立ち返り、その中のQ34（「あなたはいつもどんな雑誌を読みますか。よく読む雑誌を4つまであげてください」）に挙げられた雑誌の中から特定のタイトルを選び出し、その他の回答との相関について見ていきたい。

①ギャル系雑誌について

前年度の報告書でも述べたように、Q34については全部で100を超える雑誌名が挙がってきた。地域別に分けずに上位10誌を見てみると、穏健派であまり個性の強くないファッション誌である『non-no』と『プチセブン』が1位、2位を占めている。しかし3位以下では、『egg』（3位）『Pop teen』（4位）

『Cawaii!』（7位）と、「ギャル系」のファッションを取り上げた雑誌が入ってくる。これらの雑誌に共通するのは、読者モデルを多用し、街頭スナップを多く掲載することで、うまく現役女子高生の間の流行を拾い上げていることである。

表2 よく読む雑誌の上位10誌 (N=1101)

	誌名	人数 (%)
1位	non-no	399人 (36.2%)
2位	プチセブン	230 (20.9)
3位	egg	170 (15.4)
4位	Pop teen	163 (14.8)
5位	Seventeen	136 (12.4)
6位	Cutie	126 (11.4)
7位	Cawaii!	110 (9.9)
8位	Zipper	69 (6.3)
9位	anan	61 (5.5)
10位	Vivi	55 (5.0)
	無回答	121人 (11.0)

注) 太字がギャル系雑誌

そこで、これら「ギャル系」3誌を読んでいる人が他にどんな雑誌を読んでいるかということを見て見たところ、下の表のようになった。つまり、これらの3誌のどれかを読んでいる人は、残りの2誌を併読する可能性が非常に高いのである。むしろ3誌の間でも、『Cawaii!』は化粧に関する情報が多いとか、『egg』は白黒の文字情報のページに性的な情報が載っているなど、違いは少なからずあるが、ここでは、これら3誌を一つのジャンル（仮に「ギャル系雑誌」と呼ぶ）としてまとめ、その購読者たちのく女子高生>イメージや男性の視線に対する意識の持ちように、何らかの傾向が見出せるかどうかを調べてみた（文末の別表1を参照）。

まず初めに『egg』『Pop teen』『Cawaii!』の3誌のうちいずれか1冊でもよく読むと答えた人は、1101人中256人、23.3%であった。これらの人々で

表3 ギャル系雑誌の併読状況

	egg	N=170	Popteen	N=163	Cawaii!	N=110
1位	Popteen	97人	egg	97人	egg	69人
2位	Cawaii!	69	Cawaii!	67	Popteen	67
3位	プチセブン	32	東京ストリート ニュース	28	プチセブン	20

は、「『女子高生の援助交際や性』に関する話題について、どんなところで見聞きするか」(Q31)という質問に対して、「若者向け雑誌で」という回答が有意に高くなっている(ギャル系雑誌購読者群 52.0%/非購読者群 35.9%、以下購読雑誌による比較はギャル系雑誌購読者群/非購読者群の順とする)。その一方でギャル雑誌購読者群は、「新聞記事」「新聞広告」「電車や駅の広告」でそうした情報に接する割合が有意に低い(文末表参照)。したがってこのグループは、「援助交際」に関する情報を主に自分たちの世代をターゲットとしたメディアから得ていて、新聞や男性誌の記事広告など大人向けのメディアに流れている情報には接触が少ないと考えられる。そのことを踏まえて、以下では彼女たちの<女子高生>イメージに対する意識を探っていく。

②購読雑誌による経験率の違い

初めに、地域別に見てみると、杉並では回答者の19.4%がよく読むと答えているのに対し、浜松では27.7%と、ギャル系雑誌の購読率は明らかに浜松の方が高くなっている($p < 0.01$)。ギャル系雑誌購読者の中でみると、55.5%が浜松の回答者である。しかし、これは必ずしも浜松でギャル文化が隆盛を誇っているということを意味しない。浜松の回答者の場合、必ずしもこれらの雑誌のファッションや生活感覚に同一化して読んでいたわけではなく、「東京の女子高生はどうしているか」ということを知るための情報源として購読しているケースもあるようだ。インタビュー協力者の中にも、まったく見た目はギャル系ではないにもかかわらず、「東京に住んでいる人」のファッションを知ることができるので、毎月必ず『egg』を購読しているという人がいた。

一方、杉並では、自分の知合いが出ているかもしれない、ということで購読するケースが多いようだ。ここでギャル系に分類した雑誌に限らず、『東京ストリートニュース』や『プチセブン』もそうした視点から読んでいた、という声がインタビューの中で聞かれた。最近あまり読まなくなった、という杉並の回答者の一人は、「先輩たちが載っているときには一生懸命読んだが、自分たちの代が載るように

なったら、読む気がしなくなった」と話していた。

次にこれらのギャル系雑誌を読んでいる人たちが制服にまつわる質問にどのように答えたかを見てみよう。そもそもギャル系雑誌購読者には制服を着て学校に通っている人の比率が高い(93.8/82.1%)。制服を着て通学している人のうち、購読者は33.2%が「制服を着ていると男性の視線に違いを感じる」と答えており、ギャル系雑誌を読まない人の24.9%を大きく上回っている($p < 0.05$)。但し、「制服を着なくなったらどう感じると思うか」(Q8)への回答には有意な差は見られなかった。

次いで「オジサンから声をかけられる頻度」(Q9)についてみたところ、ギャル系雑誌購読者とそうではない人たちの間に明らかな違いが観測された(「よくある」36.5/8.8%、「1~2回ある」39.6/34.8%)。浜松のインタビュー協力者の例にもみたように、ギャル系雑誌の購読者が必ずしも「ギャル系ファッション」をしているとは限らないが、これほど大きな差がでるのは、やはり声をかける側に見分けがつくほどのファッションの差があるか、あるいはギャル系雑誌の購読者が男性から声をかけられやすい場所(繁華街や駅周辺、デパートなど)に足を運ぶ頻度が高いといったことが原因になっているのかもしれない。

声をかけられたことがある人のうち「『お金をあげるから』といわれたことがある」(Q12)という人は、ギャル系雑誌を読む人では読まない人の倍以上の比率となった(56.5/27.7%)。こうしてみると、ギャル系雑誌の読者のほうが、援助交際のターゲットにされやすいようにも思えるが、その一方で『egg』あたりは援助交際に関する記事や体験記を頻繁に掲載していることから、『egg』読者はそういう記事に触れていない人たちより「声をかけられている」ことや「金銭を提示されている」ことを、もっと敏感に察知するのかもしれない、必ずしもギャル系雑誌を読んでいる人のほうが、援助交際の誘いを受けやすい、とはいいきれない。

③購読雑誌による意識の違い

しかし、自分たちがそういう誘いについてどう思

うか、という点においても、ギャル系雑誌読者とそうでない人では差がある。たとえば「今、オジサンから声をかけられたらどう感じるか」(Q27)では、ギャル系雑誌購読グループの9.0%が「面白い」「楽しい」「うれしい」「得した、ラッキーだと思う」といった肯定的な反応を示したのに対し、同じような反応はそうでない人のグループの5.0%にしか見られない($p < 0.05$)。また「今、オジサンから声をかけられたらどうするか」(Q28)という質問については、ギャル系雑誌購読グループでは「無視する」という回答が有意に多く(53.1%/44.7%)、逆に「逃げる」(7.4%/16.6%)という回答は少なかった($p < 0.001$)。「逃げる」という反応に比して「無視する」が多いというのは、そこには不安や驚きより、ある種の慣れがある、ということだろう。さらに数的には少ないものの、「つきあう」という答えも非購読グループの0.4%に対して2.0%とやや多くなっていることも注目される。

さらにQ30の「援助交際」の定義についても違いが見られた。昨年の報告では、代償が現金であるにせよ物品であるにせよ「セックス」を伴うものについては97%以上の回答者が「援助交際」とみなしているのに対し、相手の目的がセックスではなく食事とかお茶だけなら2割から3割の人が「援助交際ではない」と思うことが明らかにされた。これを購読雑誌で分析してみると、やはりギャル系雑誌を読んでいる人では、目的が食事である場合は「援助交際ではない」と思う人がそうでない人より多かった。現金と引き換えに食事につきあうのは「援助交際ではない」とみなす人が28.9%/21.9% ($p < 0.05$)、モノを買ってあげるといわれて食事につきあうのは「援助交際ではない」と思う人が37.9%/25.5% ($p < 0.001$)であった。ギャル系雑誌の購読者に「援助交際=売春」と限定する傾向が強いということはどういうことだろうか。「援助交際ではない」から食事につきあうのは「オッケー」ということなのだろうか。あるいは、もはやかつてのように、食事だけでお金を出してくれるような奇特な人はいない、ということなのだろうか。この点についてはまだ十分な説明がつかない。

Q32では雑誌記事見出しに出てくるような女子高生やオジサンが自分の身の回りや社会にいると思うか、ということ、記事見出しの例を引きながら聞いている。ここでもやはり購読雑誌による違いが出てくる(A~Cいずれの例でも有意)。援助交際に関わる女子高生に関しては、ギャル系雑誌の購読者では、自分の身の回りに「たくさんいる」「1~2人いる」といった回答が多く(Aの例では40.2%、Bの例では24.6%が「いる」と答えている)、社会全体における割合についてもA・Bともに「10人に1人」という回答が一番多くなっている。非購読者では、自分の身の回りに「いる」と答えたのがAの例で16.6%、Bの例で7.3%、社会全体における割合では「100人に1人」というのがもっとも多い。一方、女子高生に声をかけるオジサンについては、身の回りに「いる」と答える率がギャル雑誌購読群では18.9%に比して、非購読群では7.9%と半分以下である。社会全体で見たときの割合は、両グループとも「100人に1人」という答えが一番多いが、ギャル雑誌購読群では「10人に1人」以上とする答えが37.5%であるのに対し、そうでない群では28.3%と、やはりギャル雑誌購読者のほうがそういうオジサンが多いと思っている人の割合が高いことがわかる。

最後に、Q33の「マスコミで描かれる<女子高生>のイメージについていいと思うところ、イヤだと思うところがあればお書きください」という自由記述の質問において、「いいと思うところ」を挙げた人の割合を見てみると、ギャル系雑誌購読者では45.3%と、非購読者の36.1%を大きく上回った($p < 0.01$)。「イヤだと思うところ」については有意な差は見られなかった。そこでもう一度、自由記述の中身を見直して見たが、特にギャル系雑誌に特徴的だと思われる回答は見当たらなかった(文末のQ33の表を参照)。つまり、購読雑誌の種類に関わらず、「オシャレで可愛く、流行の先端を行っていて、なおかつ個性があり、自分をしっかりと持っていて、自分の意見をはっきりと述べることができ、何事にも束縛されずに自由に人生を楽しんでいる」という<女子高生>イメージが、同年代の少女たちに支持されており、中でもギャル系雑誌の購読者は特にこ

うしたポジティブなイメージを強く意識している、ということなのであろう。

D. 考察

質問紙郵送調査の自由記述の質的分析ならびに購読雑誌別の傾向分析、さらに補足的インタビュー調査を通して見えてきたことは、今日の高校就学年齢の少女たちにとって、メディアに流れる〈女子高生〉のイメージが、自己アイデンティティを構築していく上で重要な指標になっているのではないかと、いうことである。ユニークなファッションと過剰なまでの自己主張を持つ存在として登場した「ギャル」は今日の〈女子高生〉のシンボリックな存在として、本人が実際にギャル系であるかないかに関わらず、少女たちに意識されており、しかもかなりポジティブなもの（個性、強さ、自由、自主性を併せ持つ存在）として受けとめられているようである。

このようなイメージは、恐らく90年代を通して消費文化の新しいリーダー（主体）としてのティーンズのイメージと、欲望の対象（客体）としてのロリータ的イメージが融合する中で形成されてきたものであろう。メディアは90年代を通じて、流行の先端を行くトレンドリーダーであり、かわいさと同時に大胆さも持ち合わせた、注目すべき存在として〈女子高生〉を描きつづけてきたのである。

こうしたメディアの取り上げ方を基準にすれば、彼女たちにとっては、大人の男性が自分たちを性的な対象として注目していることも、もはや当然のことに思えるのではないだろうか。今回調査対象となった少女たちは一番年上でも1997年に高校に進学した世代である。ルーズソックスやブルセラが話題になったときにはまだ小学生、中学時代に援助交際が耳目を集めている。女子高生がこれほど大っぴらに、性的な関心の対象とされるようになったことについても、それが90年代に特徴的な現象である、という認識はなく、むしろ、世間が（エッチなオジサンも含め）皆、自分たちに注目している、という認識が強いように思われる。

したがって、〈女子高生〉という存在に対して、肯定的なイメージを持っているほど、ある意味で若

年者を性的に利用しようとする年長男性に対して、無防備であるとも言える。誰もが女子高生に憧れていて、チャホヤしてくれるのが当然だと思っているからだ。さらに援助交際をしている人についても、「不道徳」「ふしだら」といった見方がある一方で、「自分たちで分かってやっているのであれば」という条件付きで認めてしまう。それはまた「自由奔放」「他人の目を気にしない」といった、ポジティブな性格の一部として認められてしまうのである。

なお、ここではギャル系雑誌の購読者のみを取り出して、その特性について分類したが、それはあくまでも傾向をみるためのものであって、雑誌が個人に及ぼす影響について論じるためのものではない。ここで「ギャル系雑誌購読者」に分類された人は、実際問題として、単に『egg』『Pop teen』『Cawaii!』の3誌のうちの最低1誌を購読しているすぎず、それ以外の雑誌や雑誌以外の情報源にも触れているわけだから、そこで得られた情報のみが実際の行動を決定付けるということはない。ここで敢えて「ギャル系雑誌」購読グループを分けたのは、あくまでインタビューや自由回答の中で浮上してきた「女子高生＝ギャル＝強い」（Q33の答え、杉並のギャル系雑誌購読者）といったイメージをよりはっきりと捉えるためであり、いわゆる援助交際のハイリスクグループを特定するためではない。そのことは確認しておく必要があるだろう。

E. 結論

日本性教育協会の調査によると、1974年から1987年の13年間に、大学生女子の性交経験率は11%から27%に伸びた。⁴その間高校生女子の性交経験率は、6%から9%へとわずかに伸びただけだった。その後、1987年から1999年までの12年間に大学生女子の性交経験率はさらに50%にまで伸び、高校生女子もちょうどその前の13年間の大学生女子とよく似た伸びを示しながら24%に達している。つまり90年代は70年代に大学生の間で始まった「性の解放」の波が高校生にまで波及した時期ということが言えるかもしれない。

10代女子の性交経験率の急速な上昇は、70年代の

アメリカにおいても経験されている。都市部に住む15～17歳の白人女性の性交経験率は1971年から1979年までの間に15%から32%へと倍増している。⁵大恐慌期以来の若者が成人するまでのライフコースのコーホート研究を行なった Modell (1989)は、この期間の性交経験率の変化について、性規範のダブルスタンダードを糾弾するフェミニズムの台頭、ベトナム戦争を契機とした若者たちの体制批判、そして Masters & Johnson に代表される新しい性科学の登場を背景とした、価値観の再編が基盤となっていると見ている。⁶それでは90年代の日本における10代女子の性行動の変化は一体どういう価値観の変化を背景にしているのだろうか。

70年代アメリカの性革命が、女性や若年者など従来の体制のなかでは力を与えられていなかった人々の反逆から生まれてきたのに対し、今日の日本における性の解放には、既存の権力構造に挑戦しようとするようなパワーは感じられない。元気、パワフル、強いといった表現でイメージされている「ギャル」たちだが、それは結局「何をやっても許される」という社会の許容性の中に育まれたものであって、自ら何かをうち壊して獲得したものではない。

確かに従来の、うぶでひ弱で受け身の少女イメージに比べれば、今日のヤマンバギャルたちはフェミニズムが追い求めてきた性的主体性を実現したかのように見えるパワフルなペルソナかもしれないが、それだけで「女子高生」を既存の権力構造に挑戦する、制服を着た少女戦士として美化するのはあまりに安易に過ぎるだろう。その前に彼女たちの「主体性」は一体どこから来ているのか、その「強さ」の根拠は何か、彼女たちに与えられている自由は真の自由といえるのか、といった問題について、もっと考えなくてはなるまい。

たとえば「女子高生が流行を創り出している」と言っても、実際にはルーズソックスも厚底靴もガン黒も主に女子高生の間での流行に留まっており、話題は提供したものの、社会全体に広がって行くような新しいものを生み出したわけではない。確かに彼女たちの行動やファッションは目立つし、いかにもパワフルではあるが、実際に社会を変革していると

はいがたい。「援助交際」は女子高生だけのものではなく、世代を超えて大人の男性をも巻き込んで広がった現象かもしれないが、それもテレクラやデートクラブ、さらには雑誌やテレビなどのメディアの手助けなしに、これほど広まることはあり得なかった。〈女子高生〉自身が社会変革のエージェントであるかのような言説は、単に景気が低迷し変革の気運に乏しい今日の日本社会を語る上でのレトリックにすぎない。

しかし、今回の調査では、女子高生自身がメディアにおける〈女子高生〉ブームをあまりにもストレートに受けとめているような印象を受けた。根拠のない自信を持って行動することは若さの特権かもしれないが、それを取えて煽るような情報ばかりを与えることは、大人としてあまりにも無責任であるように思える。もちろん、これはメディアに流れている「ギャル」イメージや女子高生関連の報道を規制することで解決できる問題ではないだろう。やはり彼女たちがもっと冷静に自分たちの置かれた位置を確認できるような情報を提供する工夫が必要であり、それと同時に大人向けメディアにおける〈女子高生〉という記号の使われ方にももっと批判的な目を向ける必要があるだろう。

(文責 佐藤(佐久間)りか)

<付記>質問紙およびインタビュー調査の実施・分析は、特に辻泉、花田智弘の協力を得て行なった。

¹ 東京都性教育研究会『児童・生徒の性』

² 東京都性教育研究会『児童・生徒の性』；日本性教育協会『青少年の性行動—わが国の中学生・高校生・大学生に関する調査報告』第1～5回

³ 「よくある」と回答した人を優先したが、杉並では予定人数を確保できなかったので「1～2回ある」と答えた2名を加えた。

⁴ 日本性教育協会『青少年の性行動—わが国の中学生・高校生・大学生に関する調査報告』第1～5回

⁵ Alan Guttmacher Institute, *Teenage Pregnancy: The Problem That Hasn't Gone Away*, 1981.

⁶ John Modell, *Into One's Own: From Youth to Adulthood in the United States 1920-1975*, 1989.

(別表1) 購読雑誌タイプ別集計結果一覧

ギャル系雑誌購読者(『egg』『Pop teen』『Cawaii!』のうち1冊以上を読んでいる)とそれ以外の回答者の回答分布について χ^2 乗検定を行ない、有意差のあるものを次のとおり示した。

*** P<0.001 ** P<0.01 * P<0.05

複数回答の質問については、各選択肢ごとの検定結果を示した。

Q4 通学時に制服を着ていくか(学校に通っている人のみ)

N(回答者数)	ギャル系雑誌購読群 (241)	非・ギャル系雑誌購読群 (822)
着ていく	93.8%	82.1%
着ていかない	6.2	17.9

Q5 制服への視線の違いを感じるか(学校に制服で通っている人のみ)

N(回答者数)	ギャル系雑誌購読群 (226)	非・ギャル系雑誌購読群 (672)
感じる	32.3%	24.9%
感じない	37.2	45.1
わからない	29.6	30.1

*

Q9 オジサンに声をかけられた経験について

N(回答者数)	ギャル系雑誌購読群 (255)	非・ギャル系雑誌購読群 (844)
よくある	36.5%	8.8%
1~2回ある	39.6	34.8
ない	23.9	56.4

Q12 「お金をあげるから」といわれたことがあるか(声をかけられたことがある人のみ)

N(回答者数)	ギャル系雑誌購読群 (193)	非・ギャル系雑誌購読群 (365)
ある	56.5%	27.7%
ない	43.5	72.3

Q27 今、オジサンから声をかけられたらどう感じるか

N(回答者数)	ギャル系雑誌購読群 (256)	非・ギャル系雑誌購読群 (845)
肯定的に反応(面白い/楽しい/うれしい/得した、ラッキーだと思う)	9.0%	5.0%
肯定的な反応がない	91.0	95.0

*

Q28 今、オジサンから声をかけられたらどうするか

	ギャル系雑誌購読群 (256)	非・ギャル系雑誌購読群 (845)
N (回答者数)		
つきあう	2.0%	0.4%
ことわる	31.3	34.6
無視する	53.1	44.7
逃げる	7.4	16.6
その他	6.3	3.8

Q30 はじめてあった男の人と以下のことをするのを「援助交際」だと思ふ人の割合

	ギャル系雑誌購読群 (256)	非・ギャル系雑誌購読群 (845)
N (回答者数)		
お金をもらってセックスすること	98.8%	98.8
お金をもらって食事などにつきあうこと*	71.1	78.1
モノを買ってもらってセックスすること	96.9	97.7
モノを買ってもらって食事などにつきあうこと***	62.1	74.5

Q31 「女子高生の援助交際や性」の話題を目にするメディアはどれか

	ギャル系雑誌購読群 (256)	非・ギャル系雑誌購読群 (845)
N (回答者数)		
若者向け雑誌で***	52.0%	35.9%
大人向け雑誌で	22.7	25.8
テレビで	92.2	93.1
新聞の記事で*	30.9	38.7
新聞の広告欄で**	8.6	17.0
電車や駅の広告**	13.7	22.4
その他*	9.4	5.7
あまり目にすることはない	1.5	4.0

Q32 雑誌の記事見出しについて

A 「父親のような中年男性との『援助交際』で気軽に金を稼ぐ女子高生が急増中」

Aのような女子高生がまわりにいると思うか

	ギャル系雑誌購読群 (256)	非・ギャル系雑誌購読群 (841)
N (回答者数)		
たくさんいる	7.8%	1.0%
1~2人いる	32.4	15.6
いない	59.8	83.5

Aのような女子高生が社会にどのくらいいると思うか

	ギャル系雑誌購読群 (256)	非・ギャル系雑誌購読群 (838)
N (回答者数)		
2人に1人くらいいる	1.6%	0.6%
5人に1人くらいいる	13.3	8.9
10人に1人くらいいる	37.5	28.8
100人に1人くらいいる	24.2	32.6
ほとんどいない	11.3	11.1
わからない	12.1	18.0

**

B 「大馬鹿者か、抜け目ない天使か。女子高生の心理『パンチラ』1回 5000 円、『ウリ』なら 2万 5000 円」

Bのような女子高生がまわりにいると思うか

N (回答者数)	ギャル系雑誌購読群 (256)	非・ギャル系雑誌購読群 (843)
たくさんいる	3.9%	0.5%
1~2人いる	20.7	6.8
いない	75.4	92.8

Bのような女子高生が社会にどのくらいいると思うか

N (回答者数)	ギャル系雑誌購読群 (254)	非・ギャル系雑誌購読群 (834)
2人に1人くらいいる	3.1%	1.3%
5人に1人くらいいる	10.6	6.0
10人に1人くらいいる	31.9	21.0
100人に1人くらいいる	29.5	31.3
ほとんどいない	11.8	18.5
わからない	13.0	21.9

C 「アキレタ常連さんの招待 援助交際の常連 繁華街で昼間からウロつく中年」

Cのような人がまわりにいると思うか

N (回答者数)	ギャル系雑誌購読群 (254)	非・ギャル系雑誌購読群 (839)
たくさんいる	5.9%	1.7%
1~2人いる	13.0	5.2
いない	81.1	93.1

Cのような人が社会にどのくらいいると思うか

N (回答者数)	ギャル系雑誌購読群 (256)	非・ギャル系雑誌購読群 (845)
2人に1人くらいいる	2.8%	0.7%
5人に1人くらいいる	10.4	6.7
10人に1人くらいいる	24.7	20.9
100人に1人くらいいる	25.5	29.2
ほとんどいない	10.0	15.6
わからない	26.7	27.0

**

Q33 マスコミに描かれる<女子高生>イメージについて

N (回答者数)	ギャル系雑誌購読群 (256)	非・ギャル系雑誌購読群 (845)
いいと思うことがある**	45.3%	36.1%
イヤだと思うことがある	89.1	89.8

(別表2) マスコミで描かれる〈女子高生のイメージ〉で、ギャル系雑誌購読者がいいと思うところ (Q33・自由記述)

キーワード	具体的回答
流行 先端 中心	流行はほとんど作ってるゾ。例)プリクラ、PHS、ルーズソックス、日サロ、ミニスカート(ひざ上 15~25cm)/流行を生みだしているという所/流行をつくっている/女子高生が人気あるものは流行だす/流行の最先端とされるところ/流行の服など/流行は女子高生が一番のり/流行ものはほとんどが、「女子高生に流行の…」と書かれてたり言われてたりするところ/流行が女子高生から始まっているといわれるのは、「オシャレ」ってかんで、うれしいです/はやりものが女子高生からはやっていくこと/女子高生は楽しそう。女子高生は流行のセンタン/今の流行がわかる/世間のお騒がせ、注目的、流行にびんかん。ファッション/明るい、流行の中心/流行などをさきどっているようで、ファッション etc において女子高生が目立っている/いろいろな意味で(ファッションや流行など)女子高生を中心に時代が回っていると思う/女子高生がいろんなコトの中心だと言われているところ/女子高生がハカリを作っている
マスコミ 注目	マスコミが女子高生、女子高生と話題にし、「女子高生」というブランドになって、制服を着ているだけでちやほやされる/マスコミで話題にとりあげられているところに、なにか女子高生というものに価値観をおぼえる/テレビや雑誌が身近になった/かっこよく特集されてると若いてやっぱいいなと思う/高校生が目立って(注目されて)トクベツなかんじするとこ/雑誌に一般の子ものせてもらえること/TVに出れる/注目されている所/女子高生が貴重っぽく扱われる/高校総体などを中継してくれるところや、学生、女子学生だから割引してくれるところ/いろいろな情報を見ること。いろいろな視点で女子高生が見れる/事実であるところ/そういう子がいてやめてほしいとテレビでうたえているようなところ
自由	けっこう自由に生きているところ/自由ほんぽうに生活しているところ/いろいろ自由に人生楽しんでますってかんじがイメージづいてるところ/素直、やりたいことができる/「今」という時を満喫している。おしゃれで、かわいくて、自由で、受験勉強とか、親の期待にも拘束されないで…社会の「華」。うらやましい/自由でたのしもう/女子高生はまわりの目を気にしないで、自由に自分の思ったことができる(ファッションに関して)/自由に生きていること/自由に自分の好きな事だけをやって、楽しそう/自由である/楽しそうだし、自由な感じがするところ/女子高生にしかできないことを認めてくれる所/若いから許されることが多い気がする
意志 意見 言う	自分の言いたいことややりたいことをして自分の意志を人に伝えているところ/何かと喋ってチャラチャラしてするように見られるけど、本当は自分の意志をしっかり持っている/思ったことをはっきり言うところ/何をやるにも、こそこそしたりはしないから。自分の意見をはっきり言える/言いたいことを言える/自分の意見を素直に言っているところ/自分の思った事はズバ ² と言うところ。制服はやっぱかわいい。おもしろい/言うことははっきり言う。センスがいい。体がやせていて、超かわいい/はっきりと自分の意見が言えること/物事をはっきり言う所/外見で判断されちゃうけど、実際はいろんな事ちゃんと考えてる/いい意味でノリがいいと思われている
元気 明るい 楽しそう 若い	元気がいい/明るく見えるところ/いつも楽しそうなところ/若い、楽しそう/明るく、楽しくウケい。かわいい/若くて元気で明るい!!/はじめて、元気、よく遊ぶところ/華やかで若々しくてかわいいイメージ。なんかパワフルなことか/若くて元気?/若い!/いちばん輝いている時期/楽しそう/回りから若いというイメージがある/げんきいっぱいなところ/清楚で明るい、元気というイメージ/元気でおしゃれな所/元気。ツレとか大切に作る/明るく楽しそう。大人っぽい/元気がいい、パワフル、明るい、正直、素直/明るい、元気
おしゃれ カワイイ スタイルいい	おしゃれ、かわいい/ファッションに敏感でおシャレ/オシャレでかわいい/若くておしゃれ上手なイメージ/センスいいとこ/ファッションがカワイイ。明るくて楽しそう/カワイイ、きれいな子が増える/可愛い/キレイな子いっぱいいる/かわいい、流行 No.1、元気、青春まっさかり/女子高生はスタイルがいいとかかわいいとか/スタイル、顔がよくなり、みんな大人びたというところ/足が長い、スタイルがよい、オシャレ/特に東京の女子高生は遊ぶ所が多くて楽しそう。おしゃれ
自分 個性 自信	自分というものをもっている。おしゃれ/自分をもっている/個性が出ていいと思う/個性が出ている/個性があるところ/女子高生も進化してきた(ガン黒もいれば、ゴン黒もいる)個性で勝負している/自分自身にいい意味で自信を持っているところ。言う事はきちんと言うところ/細くて自分に自信があるなってかんじのところ
強い	強/女子高生=ギャル=強いて感じで、周りの人に一目置かれてる気がするところ/強いと思われている。何かとしっかりとしている/ルーズソックスをはいていたり、スカートが短くしていたりすると、テレビとかでコギャルが強いというイメージがあるらしく、あまり、チカンされない/はっきり性格がしている所/思いきりが良い。優遇される
制服	制服着ると男のコがいっぱいナンパしてくる/制服がかawaii

(資料) インタビュー結果まとめ
補助的なインタビュー調査の結果得られたコメントを、質問毎にまとめて掲載する。

<回答者年齢一覧>

(2000年4月1日現在の年齢)

回答者ID	浜松	杉並
1	17歳	17歳
2	16歳	17歳
3	16歳	17歳
4	17歳	18歳
5	16歳	17歳
6	18歳	17歳

■世間の大人が抱いているイメージについて

浜1:ギャルっぽい子に変なふうに見られる(援助交際してるんじゃないとか)。でも皆がみんなそんなことしているわけじゃない。自分のファッションは自分流。普通。

浜2:なんかスゴイ遊んでいるっていうイメージだと思うんですけど、確かにあまり勉強していない人もいますが、そこまで墮落しているわけではないと思うんですね。確かに墮落している人が多くなって来たということはあるかも。ここ4~5年、ミスカが増えて、勉強もしなくなって、援助交際とかもあって。髪の毛染めててもちゃんとやってることはやってるけど、犯罪みたいなことしちゃう子があるとみんなのイメージが悪くなっちゃう。やっぱり外見で判断されちゃうところはあると思う。学校の制服見たって、市立のほうが頭良さそうに見えるし。スカートの長さとか髪の毛とかで「品位が下がってる」みたいな。ただ、そういう子は誘われやすいとは思いますが、最終的に(援助交際)するのは別に私みたいに普通の格好でも茶髪の子でも変わらないと思う。

浜3:髪の毛の色白くて、ルーズソックスはいてて、何も考えてなくて今さえ楽しければいいって思ってると思われてる。でもおばさんとかでも金髪の人とかいるし、そういう外見は女子高生らしさというより自分らしさだと思う。たまたま皆同じになっちゃってるけど、でも親しくなれば外見とか以外のところも見えてくるから、見た目どおりの人と思わない。でも仲良くなれないで携帯番号知ってるけど遊んだりはない人とかって場合には、大人が思う女子高生みたいに見える部分があるかも。

浜4:援助交際みたいなことを誰でもやっちゃうみたいって言ってる。自分の周りには全然そういう人はいないけど、確かにそういう人はいるだろうと思う。ギャルっぽい友達がいるが、そういうことはしていないし、外から見ただけじゃ分からない。でもマスコミではギャルっぽい格好の洋服とかお化粧とか見ると、そういう子は悪い、みたいな。

浜5:バカでエッチでイヤらしいと思っているけど、浜松駅のあたりのすぐコワイギャルとかもエンコーなんてしてない。そういうのって髪の毛黒い子の方が多いいんだって。そう

いう子って家族とか先生からいろいろ言われて肩身が狭いから、結構悩んでたりして、詩の本とか読んでたりする。すごいいろんなこと考えてる。皆お母さんが好きだし。仲間意識強い。おばあちゃんとか私を見て簡単に股を広げそうだっていう。自分で見ても、拒みそうじゃないですよ。(拒むときは拒むけど)。大人のイメージってそう間違ってもいないと思う。自分の周りにも誰とでもセックスしちゃう人はいっぱいいるし。でもギャルで今だに処女の子もいる。大人だって真面目そうな格好してても毎日ソープ行ってる人だっているわけですよ。うちらはよくしゃべるし、おばさん対女子高生の喧嘩みたいにすると視聴率高いんじゃないですか?おもしろいネタだから。ごく一部にそういう人がいて、でも気にしない。自分は違うから。

浜6:ルーズとかはいてスカート短くしているとみんなついていくと思っちゃうんでしょね。高校生の頃は浜松の子は誘ったってついていけないのに、と思ってた。でも今後輩の話とか聞くと、結構そういうのついていく子もいるみたいだし。部活中心の生活だったから、知らなかった。

杉1:自分がイメージするのは普通に渋谷にいる可愛い女の子達。制服着ててちゃんとメイクしてて。一般の人がイメージするのは、ルーズとか援交とかそんな感じ。ルーズはいてなかったら「中学生?」とか聞かれる。外見はルーズはいても中身は普通の子が多いし、反対に真面目そうに見える子がやったりすると思うし、外見だけじゃわからない。ルーズはいている子がやってる、とお父さんの年代の人は思ってるけど、それはない。

杉2:今の女子高生は自由に生きてる、今が楽しければいいって言う、そんな感じ。最初のうちそういうの憧れだったりしたけど、実際そういう歳になるとなんか追い詰められているような気がする。今は良いけど、10年後どうなるんだろうとか。イメージとしては目の回りが白いか。ガングロとか花がついてそうとか。露出がスゴイとか。じぶんもそういう時あった。でもそういう見た目的なことではなく、気持ち的にやることが自由でうらやましいと。今が楽しければいいというのと、将来楽しむために今苦勞するのも「あり」と思うようになって。大人から見たら、テレビ出ている女子高生とかすごいばかな事言ってる、今楽しんでるだけで将来のこと何も考えてないイメージだと思う。オジサンから見れば制服着てればみんな援交に応じてくれるんじゃないかと思ってしまう。援交してない大人から見たら、今の高校生がふしだらだから、隙があるから声をかけられるとおもってるけど、そういう事に便乗して声をかけてくる大人も卑怯じゃないかと。マスコミでも大人向けだと援助交際自体がトピックとして取り上げられているけど、若者向け雑誌だと投稿欄とかにごく当たり前のことみたいに載っている。だから目をつけてるところが全然違う。成人雑誌でも「問題だ」って取り上げてるけど、面白おかしくやってるから、女子高生のそういうイメージをどんどん作り上げちゃってる。女子高生はお誘いが来るのを待っている、制服の着方で、

こういう着方の子だと声をかけると何%がOKとか、どうやったら成功するとか書いてるのは見当違いじゃないか。でも世間のイメージと自分のイメージが全然違うとは思わない。

杉3: 街の中でも女子高生とか地べた座ったりしてるじゃないですか、ああいうのはマネできないし、化粧が気持ち悪い子とかいっぱいいるじゃないですか。ああいうのとかは、高2のときはちょっとやってみたくて思ってたんですけど、いまはもう落ち着いてきてああいうのは別世界。eggとかの読者モデルは見てる分にはかわいいと思うときもあるし。でも実際に出てくると怖い。自分では自分のことをギャルとは思ってないけど、そう言われても悪い気はしない。

杉4: 渋谷とかのギャルって怖い。しゃべり方とかが迫力がある。いっぱいすぎるって怖いですね。なんだろう、堂々としすぎてる感じが怖いですね。図々しい感じ。最近は一色になってきている。色白い子でも厚底とかはいて。すごい幼い顔で、化粧もギャルだからするんじゃないで、それが普通になって老けた感じになって。私たちのときはギャルってメッシュとか髪の色だったんだけど、今はそれも普通だから。雑誌に出るくらいまで行かないとギャルにはならない。

杉5: 最近はいわゆるギャル系っていうのがよくわからなくなってきた。でも渋谷にいるような子は仲間意識も強くて怖い。女子高生をテレビで取り上げると必ずギャルで化粧して、変なしゃべり方してる、それが変だって言うのは言ってくれてせいせいするけど、それがみんなそうみたいになり思われるのはイヤ。今の日本はこんなになっちゃってんだよ、って戒めてるのかも。でもいい方向には向かってないので、意味ないと思う。テレビ的には面白がってるだけ。でも、もし女子高生が全然マスコミに取り上げられなかったら、それはそれでつまらないし、さびしい。『学校へ行こう』とかに出て来るギャルはあれでお笑い芸人みたいなものだから、それを「女子高生」と思ってるのは見ていない。(大人は)軽い、将来を全然考えてないっていうふうに見ている、うちの父親とか。

杉6: 自分でも去年まではギャルだった。校則破って金髪のギャルで。今は違う。自分がやってることに馬鹿馬鹿しくなってる。でもギャルにも幅があって、何も考えてない子は考えてないし、自分の将来とか考えてる子は考えてる。自分はどっちかっていうと、考えてないわけではないけど、これから未来もギャルのままじゃいけないし。だから戻ろうかな。マスコミは女子高生ってだけでイメージを決めてるけど、確かにギャルの考え方が普通の子にもある。ギャルじゃなくてもプチ家出とか、親のお金を黙って取ったりとかあるし。ギャルの友達とかは自分たちが流行の先端っていうか、自分たちが中心って、思いあがりですけど、思ってたね。やっぱり新種の生き物じゃないですか。注目されているって。でもギャルにも幅がある。大学行きたいって子もいるし、家業を継ぐって決めて遊んでる子もいるし、ただ今に流されてって子もいる。

■東京と浜松の女子高生で違いはあると思うか。

浜1: ちょっと違うかな? やっぱ大人が思うみたいに、テレビに流れるのをそのまま思っちゃってる。言葉遣いがコワイとか。あれはあくまでも一部だろうと思うけど。ファッションとかでは変わらないと思う。

浜2: ギャルは浜松ではあんまり見ないですね。東京は遊べるところが多いし、勉強も厳しいところと楽なところの差が激しそう。自由な学校も多い。ファッションとかも系統で分かれてるのが色濃いつ感じ。突き詰めてるっていうか、東京で流行ってることもすぐテレビや雑誌でとりあげて、こっちでも同じように売るので、東京にしかないものってあまりない。特に違いを感じない。ただ、声かけてくる人の数は(東京の方が)多かった。

浜3: 歩いている人の数がちがう。やっぱ、やってることが凄そう。東京は雑誌とか読んでると女子高生とか一杯出て、なんか勇氣あるなあって感じがする。eggとか見ると、悪い意味じゃなく、周りを見ていないっていうか。いい意味で意識していない。なんか連帯感あって、友達がいれば何でもできる…あ、でもそれは一緒か、どこも。

浜4: なんか、東京の方が声かけられやすいと思っていた。浜松はもっと大人しいだろうと。でも女子高生自体はあんまり変わらないだろうと。朝起きて学校行って、とかやってることとか変わらないと思うんですけど。ファッションも。浜松の子もテレビとか雑誌をお手本にしているから。

浜5: もうメディアは日本中に流れてるわけだから、情報が全部東京だけじゃないし、男の人だってみんなそういう本能があるから(声をかけられる率は)全然変わらないと思う。考え方は東京の子の方が早いし、浜松はそれをマネする。浜松の子を東京の子が真似するなんて聞いたことがない。お店の数も人の数も違うから、やっぱり浜松は遅れてると思う。東京で援助交際が流行っているの聞いて、浜松でもやりだした。eggでは東京ですでに援助交際なんて下火になってきたと書いてあった。

浜6: 東京の子は誰にでもついて行っちゃいそうなイメージがあったんだけど、実際はイヤなものは無視する。浜松の子は声かけられると無視しないですぐ信じちゃう。案外何でもついていっちゃうかもしれない。ファッションでも浜松のギャルは自分に似合う格好をしないで、まねだけして浮いている。浜松の方が流されやすい。雑誌とかニュースとか一部のついてっちゃう人のことが報道されると、みんなそうかと思ってました。

■援助交際とすぐにわかる誘いを受けたことはあるか

浜1: お金見せたり自転車のかごにお金を入れて来たりした。

浜2: 2万円くらいで、って。別にそれで何を、とはいわない。

浜3: とりあえずお金上げるからって言われて。高1の頃制服着てた頃。

浜4: お金あげるから、って言われて。5万円で一緒に遊ぼうよ、って。40か50くらいの人。返事もしないで逃げた。

浜5:小学生(6年)のときに東京で、ご飯だけでも、カラオケ行こうよ、何が欲しいの?って。あ、これがエンコーなんじゃんって。お金もらえるって。でもそんなときは処女だったからついていかなかった。

杉1:1年のときは(援交の誘いが)全然わかんなかった。写真撮ってくださいとかいって、撮ってあげたりしたら、それは援交のきっかけだったけど、全然意識せずに素直にやってた。今はカラオケ行かない?とか一緒にお風呂入ろうとか。Hしようとか、お金あげるからさあ、とか。AVのキャッチとかはちゃんとした人は名刺くれる。新宿の方がAVにしろ援交しろストレートに話して素直だと思う。

杉2:オジサンと食事に付き合わない?なんでも好きなもの買ってあげるって。

杉3:学校がえりに自転車に乗ってたら自転車に乗ったオジサンが3万円持って「これあげるから僕の部屋においてよ」って。こっちこっちって。

杉4:いくらで、みたいに言われて。

杉5:ホンバンなしで2万でどう?って。びっくりしました。(ちょっとはうれしかったんだけど)

■ そういう誘いを受けたことで大人の男性に対する考え方が変わったか

浜1:そういう人もいるんだな、というくらい。皆が皆そうじゃないし、でもそういう人の子供でなくて良かったって思う。

浜2:昔はそういうのは遠い世界だと思ってたけど本当にあるんだって。何かあんま騙されちゃいけないとか、あんまり甘くないなということは思いました。

浜4:外見では判断できない。スゴイ真面目そうな人も声をかけてくるし。お父さん大丈夫かな、って。

浜5:お父さんもそういうことしているんじゃないか、と思うことはある。コワイから聞いてない。向こうも聞いてこない。

浜6:お父さん達と同じ年代の人が自分たちに手を出してくるって言うのが、信じられないというか、野蠻て言うか。援交やってるオジさんばかりじゃないのに、そういうイメージがついて、なんかいやらしい。電車の中とかでとなりにオジサンがいると異様にいや。痴漢されるかな、とか。40代とかだと。若い人の方が安心。

杉1:痴漢は(電車に乗ると)毎回される。前はオジサンの横に立って触らせて3000円取ってたけど、最近はおにいさんにただで触らせて満足する。(援助交際では)ときどきお医者さんとかいて頭いいんだ。いろいろ教えてくれて。スゴイ人はスゴイよ。いろんな人がいるっていうのはわかった。お互いが納得しているなら、別に文句言われる筋合いはない。二人の交渉みたいな感じだから。

杉2:ショックでしたね、自分もそんなに軽く見えんのかなって。それとこんな人が日本を動かしてんのかなって、だから日本ダメになってきたのかなって。不況だったり、政治家で問題起きても大体男の人だったり、女の人だったらもっと禁欲的じゃないかとか。

杉4:お父さんに「しないでね、恥ずかしいから」って言った。自分のお父さんくらいの方がそういうことしてて、ああ、って思いますよね。日本も落ちてるんだなあって。「恥ずかしいのかな」って思っちゃいますよ。

杉6:金で釣るんだ、大人は汚いなって思いました。友達が援交した相手にどうしてそういうことするのか聞いたら、奥さんはお見合い結婚で、恋愛したことなくて、相手はやっぱ若い子がいいって。それ聞いたら、その友達はそんなこと考えてる人としたくない、ってのがあったらしく、泣いてホテルを出たって。急に我に返ったっていうか。

■ 自分は援助交際をなぜしない(ORする)のか

浜1:私は絶対いや。絶対あとでなんか返ってきそうだから。

浜2:プライド。彼氏とかもいるし。お金がほしいというのはあるけど、そこまでしない。

浜3:援助じゃないならナンパなら付き合うけど、2万でどう、とかいうのはいや。無視する。お金は欲しいけど、そのお金でもの買っても、空しさが残ると思う。こんなことやっていいのかな、と思うのはイヤだからしない。

浜4:お金はそりゃ欲しいですけど、やっぱり気持ち悪いっていうのがあるんですよ。ついてっちゃって、どうなるかわからないじゃないですか。後のことが心配だから。何をやられるかわからない。

浜5:お金のためじゃない、お金のことを忘れちゃうような関係なら。基本的にやるだけって言うのはいや。なんか必要な関係でいたい。援助交際は援助交際だと思うけど、疑わしいような関係ではなくする。はじめにキチンと話し合う。期限が1年間で、2万というのが時間なのか、1回やったら2万なのか、何曜日の何時に電話するとか、お風呂には一緒に入るかどうかも決めて、相手が結婚しているかも聞いて、どういう仕事してるかとかも。それで最後までやらない、ということはない。男の人がかわいそうじゃん。でもそういうのは一人の人としかしたことない。必ずお金もらえる安全な人だったから半年くらい続いたけど、でももうしない。100人に1人くらいしかいないような安全な人だったと思ってるから。今はお金無いけど、我慢してる。自分ではすごく悪いことをしたっていう実感はないけど、親には話さないけど。いざやって見ると簡単なことなんだけどね。普段やってることとお金がもらえる。自分が傷つかないようなやり方選んだから。悪いことしたとしたり、自分のからだに対してではなく、お母さんに対して。お母さんには納得できないことだろうから。セックスしてお金もらうなんて。

杉1:今だったらHなしでぎりぎりのところまでで25000ならやる。Hが3万が相場だから。七万でいわれたこともあるけど。普通は3万くらい。30歳以下だったらお金もわなくても友達になる。40過ぎてても渋めだったらいい。あまりにも汚かったらいい。普通に背広着てる普通のオジサンだったら、お金くれたらホンバンはやらないけどギリギリまで。援交やってマイナスになったことはない気がする。全然入れ